The 18th World Congress of Dermatology

Ichiro Kikuchi

(National Leprosarium Kikuchi Keifu-En)

The 18th World Congress of Dermatology was held in New York in June 1992, during which a symposium on leprosy was chaired by Dr. Bhutani of India. He characterized the spectrum of leprosy and stated that leprosy patients in the world numbered 20 to 15 million, as against the 5,500,000 by

a WHO report. Azulay of Brazil proposed a concept of the third type of leprosy reaction with auto-immune antibodies following type 1 and type 2 reactions of Jopling. This has aroused a considerable discussion.

第18回世界皮膚科総会「らい」シンポジウム
ブタニ教授発表中

第18回世界皮膚科総会出席記

菊池 一郎

国立療養所菊池恵楓園

平成4年6月、ニューヨークでおこなわれた世界皮膚科総会のらいのシンポジウムを聞く機会に恵まれたので、その感想を述べてみたい。筆者はらいは初心者で、らいの国際学会出席も初めてであり、英語も不十分であるので的外れの発言があることをお許し願いたい。

世界皮膚科総会は5年に1回催され、10年前は東京、5年前はベルリンで行われた。いずれの場合も数千名も出席し盛会であった。ニューヨーク市は治安が悪いので悪名高く、出席者には学会本

部から危険な所には行くなとか、タクシーの乗り方にいたるまで色々注意と警告の手紙が舞い込んだ。

戦々競々として出かけたわけは、学会のあるジャビッツ・コンベンション・センターはハドソン川に面した数ブロックにもわたる巨大な建物であるが、そこは治安の悪い8番街のまっただなかであるからである。どうもニューヨーク市当局はこれらの建物を建て、この部分の再開発を図っているようである。

らいのシンポジウムは6月12日に始まった学会の最終日に近い17日の水曜日であった。広い講堂でシンポジウムは厳粛に行われた。

らいのシンポジウムのプログラム

1. Spectral concept of leprosy
Lalit K. Bhutani, India
2. Reactions in leprosy, clinical aspects
Rubem D. Azulay, Brazil
3. Reaction in leprosy
Bernard Naafs, the Netherlands
4. Cytokins in leprosy
Robert L. Modlin, USA
5. Experimental chemotherapy
D. K. Banerjee, England
6. Multi-drug therapy in leprosy
Jose Terecio de las Aguas, Spain
7. An overview of leprosy research at Carville
Robert C. Hastings, USA
8. Conclusions
Lalit K. Bhutani, India

司会者ブタニ教授

ブタニ教授は有名な学者で何度も来日しているし、論文も多い。司会者でもあるが、らいの一般的な話と病型の話を格調高い英語で講演した。彼はハンセン病という言葉の使用には反対であった。ハンセンはこの病気に罹患したわけではなく、病原菌でもないからである。しかし, leper (らい患者, つまはじきされる人という意味もある) という言葉は我々はこの会場から出たら使うべきでないとい力説した。らい患者の統計で本年WHOから発表されたのは550万という数字があるが¹⁾, ブタニ教授は2000万ないし1500万という数字を挙げていた。どうもWHOの方はMDTを買いかぶりすぎる傾向がある。インドの患者統計でブタニ教授は400万, WHOのほうは300万と数がえらくおおざっぱである。アジア, アフリカ, 南アメリカの3大州で患者の99%が住んでいるともいった。

T型はホストの菌に対する抵抗が強く, 逆にホストが強く破壊されるのにたいし, L型はその逆である。ブタニ教授はT型に第2次世界大戦で

ロッテルダム, アムステルダム, レニングラード, ロンドンなどが強く抵抗し街が徹底的に破壊されたことを, その逆のL型を抵抗せず破壊されなかったパリに譬えたのは面白かった。感染症で大事なパラサイト, 環境, ホストについて我々はよく知らない, 特に菌の培養もできていないのは恥である, ブッシュ大統領はもっとらいの研究に予算を使うべきであると発言し, 感銘深い講演を終えた。患者の数から言えばインドはらいの大国である。この人の意見はよく拝聴する必要がある。

自己免疫問答

ジョップリングの教科書でもらいの1型反応と2型反応は有名である。ブラジルのアズレイ博士は自己抗体があるらい患者を第3の反応という主張を述べられた。世界の通説になっていないが, 議論が沸騰したところである。しかし, よく聞いてみるとSLEなど自己免疫患者とらいの合併とも考えられる。色々質疑応答もあったが, どうも結論がつかなかった。セッションが終わって私は, 単なる合併ではないかと個人的に質問したが, 治療上このようにした方が役に立つという話であった。私はあまり経験はないが, それでもらい患者にDLEを合併しているのは経験がある。自己抗体をつくるのであるからT型かどうか質問すればよかったと悔やまれた。

その他

サイトカインの話はむづかしかったが, らいは免疫学者には興味ある対象に違いない。

化学療法の話ではオフロキサシンだけでなくクラリスロマイシン(マクロライド系)やミノサイクリンが有効のようであるが, 実際多数の患者をつかった臨床統計ではなかった。今後の発表を期待したい。

スペインからのMDTの話には興味があったが, あいにくスペイン語であったのでさっぱりわからなかった。ヘースティングス博士はカービルで行われているリサーチ(いまはルイジアナ州立大学に移転したという)の説明をされたが動物の管理などにも言及され, 獣医や管理者なども感謝されていた。大研究所ともなるといろいろな人が協力していることがわかった。もっともあまり興味を

ひかなかったので討論はなかった。

あちこちでENLの話がいろいろでたが、ENLの命名者が日本人の村田博士であるということをいおうと思ったが、発言する時間がなくて残念であった。光田先生、阿部先生なども日本が誇る先達である。らいとエイズとの討論も少しあった。

難しい免疫学

つぎの特別講演はBarry R. Bloom博士の1992年におけるらい、根絶にむかっての展望と可能性 (Leprosy 1992 : Prospects and potential for eradication) の題はえらく高尚で魅力的だが内容はまったく免疫学そのものでさっぱりわからなかった。

私信でJopling博士にこれはむづかしかったと書いたらこのように論された。

You make an understatement when you say that immunology is difficult to understand ; I have attended lectures by immunologists and have been completely uninformed, as completely as if I had listened to a foreign language. The trouble is that one has to be an immunologist to enjoy a lecture or a paper from an immunologist.

それで博士の教科書の免疫学の所は免疫学者にまかせなかったという。

学会というとどうも学者の話を聞くばかりという傾向があるのは残念である。臨床家の実際的な話を聞いてみたかった。ポスターセッションもらいがでていたし、症例報告もあったようであるが、ばらばらでまとまりがなかった。ポスターは毎日張り替えられ討論はなかった。(展示している人がそこにおれば討論するわけではあるが) 内容も玉石混交といった具合でなんとなく欲求不満が残った。

シンポジウムの終わりにカービルをいつか訪問したいとヘースティングス博士に挨拶をして会場をあとにした。

(原稿の依頼があとにきたので、たまたま購入していたシンポジウムの録音テープを再度聞いた。コメントをいただいたジョップリング博士に感謝する。)

文 献

1) Noordeen, S. K. et al. Bull. WHO, **70**: 7-10, 1992.